

太平記の擬音語・擬態語

—平家物語との比較を交えて—

中 里 理 子

1. 本稿の目的と方法

太平記がその内容と表現において平家物語の影響を受けていることは、多くの研究者によって指摘されている。兵藤裕巳（1982）が「太平記における平家物語的表現の多用については、典拠論のレベルで、はやく後藤丹治氏による詳細な指摘がある」¹と述べるように、後藤丹治（1928）は「その説話なり文詞なりの上に、平家物語まがひの個所が随分と多い」「平家物語に先蹤を求めて著述された状態を看取することが出来る」と指摘している²。

平家物語の表現の特徴の一つに、擬音語・擬態語の使用がある。古くは山田孝雄（1914）が特徴として挙げており³、日本古典文学大系解説（1959）や西田直敏（1978）は、平家物語の文体を特徴づける語彙として「擬声語・擬態語」を挙げている⁴。これらの指摘とは対照的に、太平記では表現の特

1 「太平記の〈言葉〉の構造—内なる表現史へ—」『日本文学』31号

2 『太平記の研究』大學堂書店

3 『平家物語の語法 下』（1954年・寶文館）、初出は1914年『平家物語につきての研究後編』に、「寫音または擬聲の「エイ」「ラウ」「カラカラ」「ハ」「ト」「カハ」「カラリ」「キクリ」などの用例頗る多き」とある。

4 日本古典文学大系『平家物語 上』（1959年・岩波書店）の解説で「平家物語を特徴づけている語彙」の一つに「擬声語・擬態語」を挙げており、また西田は『平家物語文体論研究』第二章「平家物語の文体研究」で「擬声語、擬態語、色彩語など感覚的な語」を取り上げ、「これらの語のとり入れ方によって、その説話、平曲の句などの文体的印象が異なる」と述べている。

徴として擬音語・擬態語を指摘するものは見られないが、太平記に平家物語の影響があるとすれば、擬音語・擬態語の使用にも、それが現れているのではないかと思われる。

管見の限りでは、太平記に関して擬音語・擬態語が調査されたものは見当たらない。そこで本稿では、平家物語の擬音語・擬態語との比較を交えて太平記の擬音語・擬態語の特徴を整理し、軍記物語の擬音語、擬態語を考える資料を提供したい。

太平記を調査するにあたっては、天正本を底本とする小学館日本古典文学全集『太平記』1～4を対象とする。諸本あるが、池田敦子（2008）が「『太平記』はどの段階の本文であっても『平家物語』の存在を意識しつつ本文形式を行っていると考える」⁵とするのに倣い、読みやすい形に整えられたものを使用した。抽出した擬音語・擬態語は、和語系のものと漢語系のものに分けて項末資料に示した。

比較対象とする平家物語の擬音語・擬態語は、かつて筆者が調査した覚一本と延慶本の調査資料を用いる⁶。

取り扱う擬音語・擬態語は従来扱われている和語系のものだけでなく、漢語系のものも含める。漢語系の擬音語・擬態語とは「轟々」「満々」などを指し、漢字表記がなされる点で言語音と意味内容に有縁性が感じられる擬音語・擬態語の特質に該当しないということもできるが、漢語系の語は和語系の語に多大な影響を与えていると思われること、中世・近世には日常語にも漢語がみられることから、一部を調査対象に加えることとした。なお、和語系の一音節の語を示す際に見やすいことを考慮し、「ふと」「ふつと」のように、すべて擬音語・擬態語の後につく助詞「と」までを

5 「『平家物語』と『太平記』のことば」『國語と國文學』85巻11号

6 「平家物語の擬音語・擬態語—延慶本、覚一本、百二十句本との比較から—」『上越教育大学研究紀要』31巻の調査資料による。覚一本は日本古典文学大系『平家物語』上下（岩波書店）、延慶本は、『校訂延慶本平家物語』（汲古書院）を対象とした。

抜き出して示す。

漢語系の擬音語・擬態語は、金田一春彦（1978）の分類⁷に示されるようにいくつかの形式があるが、和語の形式に近い「漢字二字のもの」の中から「同じ語根を重ねたもの」（「満々」など）と「同じ韻をもつ拍を重ねたもの」（「朦朧」など）を取り上げる。

2. 擬音語・擬態語の現れ方

擬音語と擬態語は概ね区別できるが、「兵ども一度にばつとぞ引き退きける（巻二一）」のように両方を兼ねているものが見られることから、ここでは区別せずに扱うこととする。

稿末資料に示したように、太平記の擬音語・擬態語は、和語系のものが異なり語数69⁸、延べ語数411、漢語系のものが異なり語数61、延べ語数104であった。

平家物語の場合、筆者の調査によると、覚一本は和語系が異なり語数48、延べ語数235、漢語系が異なり語数20、延べ語数31であった。平家物語延慶本は、和語系が異なり語数62、延べ語数153、漢語系が異なり語数71、延べ語数133であった。

今回調査した太平記の本文が覚一本の倍近い分量であることを考え合わせると、和語系のものに関しては平家物語覚一本の異なり語数のほうが多いことがわかる。延べ語数に関しては、太平記も決して少なくはない数の擬音語・擬態語が用いられていると言える。漢語系のものに関しては、太

7 金田一は、『擬音語・擬態語辞典』（角川書店）の解説で、漢字二字のものについて「一焉」「一乎」「一爾」「一若」「一如」「一然」の形式と、「同じ語根を重ねたもの」「同じ子音の拍を重ねたもの」「同じ韻をもつ拍を重ねたもの」の9形式に分類している。今回はこの中で和語の擬音語・擬態語の語形式と重なる「同じ語根を重ねたもの」「同じ韻をもつ拍を重ねたもの」を取り上げる。

8 項末の表では「吃と」「吃として」、「閑々と」「閑々として」、「どうと」「どうど」、「ひやうと」「ひやうど」を別に挙げてあるが、それぞれ同一語として数えた。

平記の本文のほうが漢文訓読調の部分が多いため、擬音語・擬態語も覚一本より多く見られる。平家物語延慶本は覚一本より分量が多く、漢文訓読調の部分も覚一本より多い点で太平記との比較がしやすいのだが、和語系のものは太平記のほうが異なり語数、延べ語数ともに多く見られ、漢語系のものは平家物語延慶本のほうが多く見られた。

総じて、太平記にも和語系の擬音語・擬態語はある程度の数量で用いられていると言えるだろう。ただし、覚一本との比較からもわかるように、異なり語数が少ないのに対して延べ語数が多く、頻度の高い語が多いことが窺われる。試みに太平記と平家物語覚一本、延慶本の和語系擬音語・擬態語で5例以上見られたものを並べると以下ようになる。(漢字表記はひらがな表記に統一して示す。語の後の数字は用例数である。)

[太平記]

あつと6 からからと15 きつと28 さと8 さつと48 さらさらと6
しづしづと35 ちと15 つと9 つだつだに7 どうと46 どつと14
はたと6 ぱつと17 はらはらと18 ひしひしと12 ふと5 ふつと6
ほのほのと7 むずと14

[平家物語覚一本]

きつと13 さつと7 ざつと20 さめざめと12 ちつと6 ちやうど7
つつと19 どうど9 どつと20 はたと8 はらはらと32 ひやうふつ
と5 ひやうど6 むずと16

[平家物語延慶本]⁹

キト13 サト8 ザット9 サメザメト21 チト7 チヤウド5 ツト
29 ハト11 ハタト10 ハラハラト21 ヒヤウド8 ホノボノト7 ム
ズト11

9 調査資料がカタカナ漢字表記のため、そのままカタカナ表記で示す。

太平記には5回以上現れる語が多いことがわかる。場面に応じてさまざまな擬音語・擬態語が工夫されているというよりは、同じような描写が多く見られることになる。また、当然ながら平家物語の覚一本と延慶本では多用されている語がほぼ重なっているのに対して、太平記では多用される語に若干の違いが見られる。

さらに、太平記の本文を見ると、擬音語・擬態語が多く用いられる場面とほとんど用いられない場面との差が非常に大きいことに気付く。擬音語・擬態語の現れ方にむらがあるのである。巻単位で延べ語数だけで見ると、たとえば巻二は和語系16、漢語系3であるのに対し、巻六は和語系2、漢語系0である。巻十では和語系25、漢語系2だが、巻二四では和語系1、漢語系5である。最も少なかったのは巻三五の和語系1、漢語系0であった。巻により偏りがあるのは平家物語も同様だが、偏り方が大きいのが太平記の特徴である。また、巻の中で擬音語・擬態語が適度に出現する場面が続くかと思うと、まったく用例が見られない箇所が何頁にも亘ることも多い。使用される語も同じような語が続くことも多く、たとえば、巻一で土岐の十郎が「山本九郎をきと見て」と書かれたすぐ後に、時綱が「後をきと見たれば」と描写され、その次の場面では小笠原孫六が「門前をきつと見れば」と描写されている。擬音語・擬態語の使用箇所¹にこれほどの偏りがあるのは、太平記が複数人によって増補、編集されてきた経緯と関わりがあるだろう。

以下、先に並べた頻度の高い語を中心に、太平記の擬音語・擬態語の特徴を見ていく。まとめるにあたっては、和語系の擬音語・擬態語を中心に、軍兵の描写と個人の描写とに分けて見たあとで、漢語系のものを見ていきたい。

3. 軍勢の描写

太平記の擬音語・擬態語の中で最も多く見られた「さつと」48例、次に多い「どうと」46例は、そのほとんどが軍勢の動きを描写する際に用いられている。小松茂人（1955）が「太平記の集團形象の表現は誇大であるが、そこに死の量的盡滅の相の深刻さ凄惨さが表現されているとも言へる」と述べている¹⁰が、平家物語と比較して、太平記では合戦場面のほとんどが軍勢の描写となっており、「時の声をどうと揚げ、数万の敵楯を突き双べ、鏃を支へて待ち懸けたり（巻九）」のように、大規模な軍兵の様子が描かれている。

本稿では、軍勢の描写に用いられた擬音語・擬態語を「動き」と「音声」の面から見ていきたい。

3.1 軍勢の動き

太平記の中で軍勢が相手の軍勢に打ち寄せたり、懸け入ったり、引き分けたり、引き退いたり、あるいは相手の軍勢が左右に分かれたり、入り乱れたりする様子を表す擬音語・擬態語には以下のような語が使われていた。合わせて用例も下に示す。

さと さつと／颯と ざつと ばと ばつと／颯と ひしひしと
ふつと むずと

例1 六波羅勢一万余騎、七縦八横に破られて七条河原へさつと引く。

（巻九）

例2 佐用・上月の兵ども三千余騎、一度にさつと打ち入つて、馬筏に流れをせきかけたれば、逆水岸に余り、流十万に分れて、（巻八）

例3 小式・松浦・草野・山賀・嶋津・渋谷の兵ども二万余騎、左右へ

10 「太平記における死の表現」『文化』19巻4号

颯と分れて散々に射るに、 (卷三三)

例4 鹿草彦太郎五百余騎、叶はじとや思ひけん、鯖江宿の後なる河の
浅瀬を渡し、向ひの岸へざつと引く。 (卷十九)

例5 南大門の前に攻め寄せたる寄手の兵千余人、一度にばと引き退く。
(卷十七)

例6 義助の二度の懸に、さしも大勢戦ひ疲れて、一度にばつとぞ引き
たりける。 (卷十四)

例7 綸子引両の笠注付けたる武者、五十余騎ひしひしと打ち寄せて、
勘解由左衛門が頸を取らんと、争ひ近付きけるところに、 (卷十)

例8 三百余騎の物どもこれをば目にも懸けず、裏へふつと駆け抜けて、
二陣の敵に打つて懸かる。 (卷二二)

例9 両陣互ひに寄り合うて、六万余騎の兵一手にむずと^{あは}并合して、陽
に開いて中をわれれじと勇みけり。 (卷十)

特に多用されていたのは「さつと／颯と」で、集団が一斉に勢いよく動く様子を表している。平家物語では、覚一本・延慶本ともに軍勢の動きに多く用いられていたのは「ざと」「ざつと」であった。「さつと」「ばと」「ばつと」も使われてはいたが用例数は少なく、軍勢を引いたり分けたりする場面では主に「ざと」「ざつと」で表現されている。

例10 強弓精兵ナリケレバ、敵憶シテ、ざと引テゾノキニケル。

(延慶本：卷九)

太平記では「ざつと」は例4に挙げた1例しか見られないことから、軍勢の動きの擬音語・擬態語は平家物語とは大きく異なっていることがわかる。

また、「むずと」は平家物語ではもっぱら個人の動きを表していたが、

太平記では数例が例9のように軍勢の動きに使われている点も特徴的である。力強い動きを表すために用いたと思われる。なお、平家物語延慶本では次のように「ハタト」を軍勢の描写に使った例が一例あった。

例11 敵ノ陣ヲ南ヨリ北へ、ハタト懸破リテ、後ヘツト通りヌ。

(延慶本：卷廿六)

太平記では、以上に見たような軍勢の勢いある動き以外に、軍勢の様子を表す特徴的な語が見られた。「しづしづと／閑々と」である。この語は平家物語では武者が落ち行く様子に主に用いられ、個人の動きを表している。太平記でも例12のように主に個人の動きを表すのだが、例13、14のような軍勢の動きを表す例が12例見られた。

例12 布皮の上に居直り給ひて、硯を取りよせ、閑々と辞世の頌をぞ書かれける。

(卷四)

例13 五千三百余騎、大将義貞の旗を守つて、羽翼・魚麗の陣をなし、猪隈を下り、閑々と推し寄する。

(卷十七)

例14 少しもあわてず、二百余騎の勢にて、石塔右馬頭・上杉少弼が勝ちほこりたる大勢を山際までまくり付けて、〈中略〉波打ち際へ閑々と打つて出でたれば、

(卷二八)

「さつと」「ばつと」などで大軍のダイナミックな動きを表す一方で、大軍が秩序立って静かに動く様子を「しづしづと」という語で表し得ている。また、「ひしひしと」は、平家物語覚一本ではくつばみを並べる様子に、延慶本では物の具を固める様子に用いられていたが、太平記では物の具を固める様子に加えて、例7のように軍勢の動きにも用いられている。「ひしひしと」以外にも大軍の様子を表す次のような例もある。

例15 警固の武士に、「誰か候ふ」と尋ねらるれば、「その国の誰かれ」

と名字を委しく名乗つて、廻廊にしかと並み居たり。 (巻三)

例16 一同に御返事申して、御前をはらはらと打ち立つて、敵の大勢にて攻め上る坂中まぞ、下り向ひける。 (巻五)

例17 宗徒の者ども、御前をはらりと立つて、先懸けして抜いて懸かる。 (巻三二)

このように、太平記ではさまざまな擬音語・擬態語を用いて兵士集団の動きを表していると言える。次に軍勢が立てる音声の描写について見ていきたい。

3.2 軍勢の音声

この項では勝どきを挙げる声と笑い声を取り上げる。先に見たように太平記で多く用いられる擬音語・擬態語に「どうと」「どつと」があるが、これらはいずれも勝どきを挙げる声、笑い声の描写に用いられている。以下に例を示す。

例18 都合その勢六千余騎、後攻の時の声を同と揚げて、追つ取り巻く。 (巻十一)

例19 寄手ども箆を叩いて同音に同とぞ笑ひける。 (巻十四)

例20 六波羅の勢七千余騎、三方より押し寄せて、時をばどつと作る。 (巻八)

例21 「さればこそ」とて、大衆ども、同音にどつと笑ひ、各院々谷々へぞ帰りける。 (巻十八)

用例数では「どつと」より「どうと」のほうが多い。平家物語の場合、勝どきを挙げる描写として、覚一本では「どつと」、延慶本では「ドト」「ハト」が用いられ、「どうと」「どうど」が用いられた例はない。「どと」「ど

つと」が一度に勢いよく響き渡る様子を表すのに対して、「どうと」は長音の働きがあるためか、響き渡る時間がやや長い印象となり、大音声があたりに鳴り響き続ける様子を表し得る。太平記は用例にも見るように、何百騎、何千騎という大軍が描かれており、平家物語よりも軍勢の規模が大きくなっているが、その軍勢が挙げる勝どきの声や笑い声は、「どうと」で表すのがふさわしかったのであろう。「どうと」は、平家物語では「むずと組んでどうど落つ」のように、多くは武者が馬から落ちる様子に用いられていたが、太平記ではそれ以外に、例22のように大規模なものが倒れる大音響を表す際に用いられている。

例22 押し合ふ程に、橋桁中より燃え折りて、谷底へ倒に同と落ちければ、数千の兵同時に猛火の中へ落ち重なつて、一人も残らず焼け死にけり。 (巻七)

「どうと」は太平記において、平家物語には見られなかった想像を超える大音響、大音声が鳴り響く様子を表す擬音語として用いられていたと思われる。

4. 個人の描写

次に個人の描写について、主に合戦場面の動きや音を表すもの、合戦場面以外の動きを表すもの、感情描写（泣く・笑う）に用いられるものに分けて見ていく。

4.1 合戦場面の動きや音

平家物語では、「むずと組んでどうど落つ」という戦いの動きや、「よっぴいてひやうど放つ」「よっぴいてひやうふつと射る」のような弓矢を使う際の描写、「ちやうど切る」「はたと切る」のような斬り合いの描写が多

く見られた。太平記でも同様の例が見られるが、出現数や種類が少なく、用いられ方も異なっている。戦いの動き、弓矢の描写、太刀の斬り合いについて平家物語覚一本と太平記の用例数とを比べると、以下のようになる。なお、ここに挙げる語が別の状況描写に用いられる例もあるため、擬音語・擬態語の後ろの（ ）内にその語の使用総数を示し、その右側にここで取り上げる例に該当する動詞と用例数とを示す。

【覚一本】

◎戦いの動き

むずと（全16例）—組む9例・とりつく1例・とってひきおとす1例・
つかむ1例

どうど（全9例）—落つ6例・臥す1例

◎弓矢

ひいふつと（全2例）—みきる2例

ひやうづばと（全1例）—射る1例

ひやうふつと（全5例）—よっぴいて射る3例・射る2例

ひやうど（全6例）—よっぴいて射る3例・よっぴいて放つ3例

つつと（全19例）—射貫く3例・射わたす2例

ふつと（全4例）—み切る2例

◎太刀

ちやうど（全5例）—きる1例・太刀が折れる1例・刀をあはす2例

はたと（全5例）—きる1例・うつ2例・（さやにささる音）1例

ふつと（全4例）—切る1例・切り落とす1例

むずと（全16例）—切る1例

【太平記】

◎戦いの動き

むずと（全14例）—組む6例・引つ組む3例

どうと（全44例）—倒る2例・落つ3例・ころび落つ1例

どうど（全1例）—落つ1例

◎弓矢

ひやうと（全3例）—矢を放つ1例・征矢を切つて放つ1例・射渡す1例

ひやうど（全1例）—射る1例

ちやうと（全4例）—射る1例・矢を射る1例

はたと（全6例）—射る3例 ふと（全5例）—射通す1例

ふつと（全6例）—射抜かる1例 ずぶと（全1例）—射通さる1例

切々〈きりきり〉と（全1例）—弓を引き絞る1例

◎太刀

打〈ちやう〉と（全4例）—打つ2例

打々〈ちやうちやう〉と（全2例）—打ち当たる1例・打つ1例

覚一本で定型的な表現となっていた「むずと組む」「どうと落つ」という表現は太平記にも見られるのだが、それぞれの語の総数に比べて使用の割合が低くなっている。そのため、別の状況描写にも使われる語を「組む」「落つ」にも使用しているという印象になり、全体の中で使用が目立たなくなっている。太平記では合戦の場面において個人の描写にあまり重きが置かれていないことが、擬音語・擬態語の使用からも見て取れる。

弓矢に関する擬音語・擬態語を見ると、平家物語では「ひやうど」を中心に類似表現が使われているのに対し、太平記では「ひやうと／ひやうど」の類似表現は見られず、平家物語で主に太刀の描写で使われている「ちやうと」「はたと」を用いている。平家物語覚一本において弓矢を放つ描写が多用され、定型化されていたのに対し、太平記では擬音語の総数に比し

て用例数が非常に少なくなっている。さらに少ないのが太刀の描写である。太刀で斬り合う際の擬音語は太平記では「ちやうと／ちやうちやうと」しか見られず、語の種類も用例数も平家物語より少ない。弓矢や太刀の描写に用いられる擬音語・擬態語が少ないことも、太平記において個人の合戦場面が集団の合戦場面ほどには描かれていないことにつながるだろう。

4.2 合戦場面以外の動き

個人の動きを表す擬音語・擬態語の中で用例数が多いのが「きと」「きつと」「しづしづと」「つと」である。これらの語が個人に関して用いられた用例数は次の通りである（別の状況に用いられた用例は除くため、稿末資料の用例数とは異なる）。以下、順に用例を挙げ、平家物語と比較しながら特徴を見ていく。

きと 4 例 きつと／屹と 26 例 しづしづと／閑々と 22 例 つと 7 例

例23 時綱はわざと敵を広庭へおびき出し、透間あらば虜らんと志して、
打ち払ひては退り、受け流しては飛びのき、人交ぜもせず戦つて、
後をきと見たれば、 (巻一)

例24 首藤左衛門五郎兄弟・後藤掃部助定基・西塔の金乗とて、名誉の
大剛の者あり。互ひに屹と目くはせして、南部に組まんと相近づく。
(巻三二)

例25 ここに、先日の僧の物語を屹と思ひ出しける上、 (巻二五)

「きと」「きつと」は、平家物語にも個人の動作に関する例が見られたが、用例数では太平記のほうがはるかに多く見られた。平家物語の場合、覚一本は「きつと」6例¹¹、延慶本は「キト」8例、「キツト」1例であった。

11 覚一本では「きつと参れ」のように命令形とともに用いる例が7例あったが、ここでは含んでいない。延慶本も同様に命令形・否定形等と共起する5例を除いてある。

覚一本の「きつと」6例中4例、延慶本の「キト」8例中3例、「キツト」1例が、先の例23のように「見る」動作を表していた。残りは例25のように「立ち寄る」「思ひ出す」などの語とともに用いられ、確実な動きや瞬時の動きを表していた。太平記では「きと」「きつと」30例のうち、「見る」「見遣る」「目合せす」など「見る」行為に関わる例が27例あった。太平記は、平家物語と比べて「見る」行為を描写する例が多いことがわかる。また、例24のように、戦闘場面でドラマティックなやり取りを表す例も多い。太平記は、戦闘場面で太刀で斬り合う戦いの動きより、目を見合わせるような行為を描き、人物像を造形しているのではないだろうか。

例26 篠塚些しも騒がず、小歌歌つて閑々と落ち行きけるを、敵、「あますな」とて追ひ懸くれば、立ち止まつて、「ああ御辺達痛く近付いて、頸に中たがひすな」とあざ笑つて (巻二二)

例27 二人の者ども、「あはれ幸ひかな。ただ一太刀に切つて落さんずる物を」と、目と目屹と見合はして、なかなか馬を閑々とぞ歩ませける。 (巻三十)

例28 これを見て、数万の敵ども、あへて近づかんとする物なかりければ、義貞閑々と伊豆の府をぞ通られけれ。 (巻十四)

「しづしづと」は平家物語延慶本には3例見られ、「落ち行く」2例、「問ふ」1例という用いられ方をしている。一方、太平記では22例と多用されており、先に見た例12やここに挙げた例26のような余裕を持った行為を表現している。なお、個人の動作に準じるものとして、例27のように2人の人物の行為を表す3例も含んでいる。「しづしづと」は個人の行為を表す代表的な擬音語・擬態語であるが、先に見たように軍勢の動きにも用いられている点もまた特徴である。なお、例28のように個人名で書かれている

がその軍勢の動きを表している例が4例あったが、個人の動作の用例には含めなかった。

例29 妻鹿孫三郎からからと打ち咲つて、〈中略〉岸上へつと刎ねあがり、
屏柱の四、五寸に余りて見えたるに手を懸け、曳や曳やと引きけれ
ば (巻九)

例30 孫六は敵三騎切つて落し、裏へつと懸け抜けて、 (巻二八)

例31 千余騎の者どもただ一手になつて、大勢の中へ颯と入り、半時ば
かり鬪つて、つと懸け抜けてその勢を見れば、 (巻十九)

「つと」「つつと」は平家物語では覚一本「つと」3例、「つつと」14例、延慶本「ツト」26例が見られ、平家物語において特徴的な擬態語であった。太平記にも例29・30のように個人の素早い動作を表す例が7例見られたが、用例数は平家物語よりはるかに少ない。また、例31のように軍勢の動きにも使われていたが、これは平家物語には見られない例である。

4.3 感情描写（泣く・笑う）

ここでは、泣く描写と笑いの描写に関わる擬音語・擬態語を取り上げる。まず泣く描写だが、太平記では「さめざめと／小雨小雨と」4例、「はらはらと」17例が見られた。平家物語では、覚一本に「さめざめと」12例、「はらはらと」32例、延慶本に「サメザメト」21例、「ハラハラト」17例、「サト」4例が見られた。太平記において泣く描写が少なくはないのだが、平家物語に比べると圧倒的に用例数が少ないことがわかる。

次に、太平記において笑いを表す描写を見ると、「からからと」15例、「にこと／莞爾と」2例、「莞爾〈につこ〉と」1例があった。個人ではなく集団の笑いでは「どうと」6例「どつと」4例が見られた。平家物語の場

合は、覚一本に「からからと」1例、「どつと」2例、集団の笑いに「どつと」4例、延慶本に「カラカト」1例、集団の笑いに「ドツト」1例、「ハト」8例が見られた。太平記と比較すると、平家物語の用例数が非常に少ないことがわかる。太平記の中だけで見てみると、泣く描写と笑う描写に用いられる擬音語・擬態語の種類や用例数に差はないのだが、平家物語と比べてみると、太平記においては泣く描写よりも笑いの描写が際立っていると言える。以下に個人の笑いに用いられた例を示す。

例32 「あの洗革の鎧は長山殿とみるは僻目か。正なうも敵に後を見する物かな」と詞を懸けられ、長山からからと打ち笑ひ、「問ふは誰そよう」(巻三一)

例33 野伏ども、からからと打ち笑ひ、「いかなる十善の君にても渡らせ給へ、〈中略〉」と言ひもはず、同音に時を同とぞ揚げたりける。(巻九)

例34 直実莞爾 〈にこ〉として打ち笑ひ、「建武より以来、三百余度の合戦に、一度もいまだ人に励まされしことはなかりつるに、〈中略〉やさしくも宣玉ふものかな。いさ返さん」と云ふままにかれこれ三騎引き返し、〈中略〉身命を棄てて戦つたり。(巻二五)

例33のように何人かの笑いを描写する例もあるが、「どつと笑う」のように全体の笑いを描写しているのではなく、個人個人の笑いを表していると思われ、個人の描写に含めた。

樋口大祐(2008)は、太平記における笑いの描写を取り上げ、「『太平記』における笑いの中で一際目立つのが「カラへト笑」という行為である」と指摘し、その表現効果を述べている¹²が、笑いの描写が太平記の特徴の一つと考えてよいだろう。

12 『『太平記』の世界観—死・笑い・永劫回帰—』『國語と國文學』85巻11号

なお、「にこと」「につこと」は第三部¹³（巻二一、二五、三十）にしか見られない語である。このような擬音語・擬態語の使用の偏りは、複数の作者が想定される成立状況とも関わっているだろう。

5. 漢語系の特徴

前節まで和語について見てきたが、漢語系の擬音語・擬態語にも集団の描写という点で大きな違いが見られたので加えておきたい。平家物語では、覚一本でも延慶本でも用例のほとんどが「峨々」「沈々」「滔々」「渺々」「茫々」「満々」など、海や山、平野、天空、月など自然を描写する語であったが、太平記では、自然描写に加えて、以下のように戦闘場面に関わる描写が見られた。

例35 血は草芥を染めて漣々たれば、尸は山谷を埋みて暈々たり。
(巻七)

例36 血は流れて大地に溢れ、衰々として洪河の如く、尸は行路に横たはつて、累々として郊原の如し。
(巻十)

平家物語では、覚一本も延慶本も尸の積み重なる様子を表す漢語系の擬態語は一例も見られない。この二語に限らず、戦闘に関わるような漢語は使われていない。太平記では、ここに挙げたように夥しい血を表す「漣々」1例、「衰々」1例、夥しい死骸や白骨、墓を表す「暈々」1例、「累々」5例が見られ、平家物語にはない漢語の用いられ方をしていると言える。第3節で触れたが、小松（1955）が「死の量的盡滅の相の深刻さ凄惨さが表現されている」と指摘したことが、漢語の表現にも現れていると言えるだろう。

13 大森北義『太平記の構想と方法』では、後藤丹治以下複数の研究者の説を挙げ、第一部が巻一～十一、第二部が巻十二～二十、第三部が巻二一～四十であると認定している。

また、稿末資料の参考に示したように、「-然」など他形式の漢語系擬音語・擬態語が多く見られ、中でも「-然」が人物や軍勢の様子に用いられている点が特徴的であった。たとえば「參然」は、軍勢の勢いや敵の勇士の描写に用いられている。また、「惘然／忙然」は17例と多数見られ、いずれも人物描写に用いられていた。「惘然／忙然」は、気抜けの様子や失神状態を表すが、これに当たる和語の「うつかり」「うつとり」「ぼんやり」が近世・近代になって一般的に用いられるまで使われていた語であると思われる¹⁴ことから、近世の擬音語・擬態語との関わりを考えるうえで興味深い用例が現れていることを指摘しておきたい。

6 まとめ

太平記の擬音語・擬態語は、平家物語と比較して種類は少ないが、延べ語数としてはある程度の数量が見られた。平家物語と同様に、擬音語・擬態語は太平記の語彙の特徴の一つであると言ってよいと思われる。平家物語にも多用される語があったが、太平記の場合は「さつと／颯と」「どうと」「しづしづと／閑々と」「きつと／屹と」等であり、平家物語とは異なる語が多用されていた。また、平家物語の場合、個人の戦闘場面や太刀で斬り合う場面の擬音語・擬態語が見られたが、太平記ではそれらは少なく、個人よりも軍勢の戦闘場面に関する描写（動きと音声を表す用例）が多い。軍勢の動きの描写には、平家物語で個人の動きを表していた語（「むずと」「つと」「しづしづと」等）も用いられていること、軍勢の描写の際に、「ばつと」のような力強い動きだけでなく、「しづしづと」のような秩序だった統制のとれた動きも表されていることが特徴的である。

太平記では平家物語より軍勢の規模が大きく描写されている。そのため

14 拙稿「オノマトベの語義変化—明治期の「うつとり」「うつかり」を中心に—」『文学・語学』176号

か、勝どきの声や笑い声に平家物語では「どつと」が用いられていたが、太平記では「どうと」を用いる例が多く、大音声が鳴り響く様子が表されている。

平家物語は個人の戦闘場面で定型的表現（「むずと組んでどうど落つ」「よっぴいてひやうど射る」等）がいくつか見られたが、太平記には見られなかった。また、太刀の斬り合いや弓矢に関する擬音語が非常に少ないのも太平記の特徴である。戦いにおける個人の描写で多用されている語は「きつと」「しづしづと」である。戦闘場面では戦いの動きを表すより人物像に関わる描写が多いと言えるだろう。また、平家物語では泣く描写が非常に多く見られたが、太平記では泣く描写以上に笑いの描写が多い。

漢語系の擬音語・擬態語に関しては、平家物語ではもっぱら自然描写に用いられていたが、太平記では戦闘場面に関わる描写も見られる点が大きく異なっていた。

以上、太平記の擬音語・擬態語の特徴を見てきたが、今後は他の軍記物語と比較し、軍記物語全体の擬音語・擬態語の使用状況を見ていきたい。さらには中世の軍記物語の擬音語・擬態語が近世の作品にどのように影響を及ぼしていくかを考えていきたい。

【引用・参考文献】

- 池田敦子2008 「『平家物語』と『太平記』のことば」『國語と國文學』85巻11号
大森北義1988 『太平記の構想と方法』明治書院
金田一春彦1978 「擬音語・擬態語概説」『擬音語・擬態語辞典』（浅野鶴子編）角川書店
後藤丹治1938 『太平記の研究』大學堂書店
小松茂人1955 「太平記における死の表現」『文化』（東北大學文學會）19巻4号
佐倉由香1999 「『太平記』の語りの機構—『平家物語』との比較を通して—」『文藝研究』147集
桜井好朗1970 「『太平記』とその時代」『文学』38号
中里理子2012 「平家物語の擬音語・擬態語—延慶本、覚一本、百二十句本の比較から—」『上越教育大学研究紀要』31巻
西田直敏1978 『平家物語の文体論的研究』明治書院

- 長谷川端1982 『太平記の研究』汲古書院
樋口大祐2008 『『太平記』の世界観—死・笑い・永劫回帰—』『國語と國文學』85巻11号
兵藤裕巳1982 「太平記の〈言葉〉の構造—内なる表現史へ—」『日本文学』31号
山田孝雄1954 『平家物語の語法 下』寶文館。

【稿末資料】 太平記の擬音語・擬態語

抽出したオノマトペを和語系と漢語系に分け、五十音順に整理した。〈 〉内は、オノマトペが表す内容（多くは、被修飾語にあたるもの）である。数字は二回以上現れた語に対して記した。

<和語系の擬音語・擬態語>

本文に示したように「ふ(と)」のような一音節語が紛れやすくなるため、すべて「と」を付して示す。表記が何通りかある場合は、それぞれの数を示した（例：「さつと」「颯と」は「さつと14／颯と34」のように分けた）。また、内容の説明で「兵」と書いた場合は軍勢を指す。

調査対象から外したのは次に該当するものである。

- 1) 「ひしめく」など、接尾辞「めく」がつく動詞の形になっているもの。
- 2) 「おめおめし」など、形容詞の形になっているもの。
- 3) 「やすやすと」のように、疊語形式であっても、語基部分（「易い」など）の独立性が高く、一般語彙として副詞的に多く用いられているもの。
- 4) 「つやつや」「ちとも」のように、陳述副詞であるもの。ただし、「ちとまどろむ」のように、情態副詞で様子・状態を表している可能性のあるものは取り上げた。
- 5) 「こまごま」「はるばる」など、疊語形式の後項が濁音化しており、語基部分が「こまかい」「はるか」のように一般語彙として意味を持つもの。例外として、「ほのほの」「さめざめ」のように語基の独立性が低いものはオノマトペとして扱った。

6)「あつと」「えいと」のようにとっさに語にならない音として現れたと思われるものは取ったが、「えいや」は掛け声と考え、今回は取らなかった。

あと／「あ」と2〈いふ3〉「あつ」と2／あつと4〈云ふ4・おびえる・嘆く声〉
荒々とした〈草鞋 えいと〈投ぐ〉「お」と〈喚ばはる〉 鳴(をつ)と〈をめく〉
かつぱと〈はね起く〉 がはと3〈障子を踏み破る・楯を投げ棄つ・河中へ投げ入る〉
がばと2〈起く・飛び乗る〉 がはがはと〈川に飛び入る〉 からからと15〈うち笑
ふ13・笑ふ2〉 からりと2〈胡籥を投げ落とす・長刀を投げ捨つ〉 からりからり
と2〈長刀の柄を内甲へ込める・鎗矢が落ちる音〉 からりひしりと〈頸が喰ひ合う〉
きと4〈見る3・肝に当たる〉 きつと8／屹と19〈見る10・見上ぐ2・見遣る・
うしろを見廻る・見帰る・帰りみる・顧みる2・見渡す・見付く・目合せす・目く
ばせす2・目と目を見合はす・驚く・思ひ出す・案じ出だす〉 屹として〈敵なり〉
切々〈きりきり〉と〈弓を引き絞る〉 ぐさと〈矢が盾に立つ〉 くはつと／活くく
わつと〈辺りの土がうげのく・赤土が崩れる〉 さと8〈兵を引く・兵を打って
出づ・打ち出づ・兵を破る・引き退く・蒐け合ふ・兵が引き分かる・馬より下る〉
さつと14／颯と34〈引き開く・兵を引く7・兵が引く・兵が引き退く・兵が逃げ
る・兵が引き分く・兵が打ち入る・兵を打ち入れる・馬を打ち入れる3・兵が懸け
入る2・入る・懸け破る・兵が懸かる・左右に分かる4・兵を追ひ出だす・一所に
集まる・旗を一同に下ろさす・旗の手を下ろす・四方に分かれる・両陣が引き退く
2・左右へ引き分かる2・陣を引く・兵が入り乱る3・帷幕を打ち挙ぐ・馬を懸け
据う・同時に居る・同時に立つ・川中へ車を遣り懸ける・車馬が左右に居流れる・
額に懸かる・木戸を押し開く・柘榴を戸に吐きかける〉 ざつと〈岸へ兵を引く〉
さめざめと3／小雨小雨と〈泣く3・泣き居る〉 さらさらと6〈登る・橋を走り渡
る2・念珠を押し揉む2・弓を張る〉 しかと3〈並み居る・噛ます・握る・支え
て〉 しづしづと5／閑々と30〈居直る・辞世の頌を書く2・参る2・馬を歩ます

7・馬を進める・落ち行く2・都を落つ・城の中へ引き入る・身繕ひする・結跣
坐す・通る・渡る・進む4・頭を取る・兵を懸く・兵が推し寄す・引いて行く・車
を飛ばす・打つて出づ・舟で打ち越ゆ・帰る・事もなげに並み居る・鳩が飛び去
る）閑々として〈打つて行く〉しとと〈鞭を打つ〉しどろに3〈なる3〉しほ
しほと3〈なる2・〈内へ入る〉すごすごと2〈参る・遷幸なる〉ずぶと〈射通
さる〉たゆたゆと〈心〉ちと12／些と3〈軍する2・馬を速む・引き退く・似る・
心地を取り直す・人心地がつく・まどろむ・打ち笑ふ・擬々す・難所・下・平ら・
風気の御事・小ざかしき〉打〈ちやう〉と4〈射る・甲の鉢を打つ2・矢を射る〉

打々と2〈甲の鍔に打ち当たる・甲の鉢を打つ〉つと9〈入る・太刀でさす・
刎ねあがる・引き下ぐ・懸け抜く2・懸けのける・懸け入る・走り抜ける〉寸寸
〈つだつだ〉に6／分々に〈頸・蜘蛛・身を砕く・割き切る・蛇を切る・身を引き
裂く・身が切りさかる〉どうと11／同と33／動と〈時を作る8・時を揚ぐ13・
勝時を作る・笑ふ6・倒る2・落つ3・ころび落つ・馬が臥す4・馬が打ちすゑら
る・馬が倒る2・橋桁が落つ・棧敷が倒る・扉が倒る・切る〉どうど〈落つ〉ど
つと13／同と〈一同に笑ふ3・笑ひ声・時を揚ぐ・時を作る7・勝時を作る・をめ
く〉にこと／莞爾と〈打ち笑ふ・笑ふ〉莞爾〈につこ〉と〈笑ふ〉のさのさと〈居
る〉延々〈のびのび〉としたる〈評定〉ばと〈兵が一度に引き退く〉はたと6〈射
る3・睨む3〉はつと〈泣く〉ぱつと16／颯と〈兵を引く7・兵が引き退く・兵
が引く2・兵が逃ぐ・兵が打ち出づ・猛火が燃え出づ・松明を同時に振り挙ぐ・燃
え上がる・炎が出づ・洪水が左右に分かれる〉はらはらと18〈涙がかかる2・落
つる涙・涙が落つ・涙がこぼる・こぼる涙・涙がこぼれ落つ・涙を落とす・涙を
こぼす5・涙を流す3・涙がかかる・一同が打ち立つ〉はらりと〈兵たちが立つ〉

ひしと〈止む〉ひしひしと13〈物の具をさし堅む・物の具を堅む4・兵が打つ
立つ2・打ち寄す2・近づく・用意す・一所へ寄る・思ひ立たず〉ひそひそと2
〈立ち別る・とり納む〉ひたと2〈馬に打ち乗る2・下り立つ〉ひたひたと2〈馬
より飛び下る2〉ひやうと3〈矢を放つ・征矢を切って放つ・射渡す〉ひやうど

〈射る〉 ふと5 〈射通す・懸け抜く2・来る・門を出る〉 ふつと6 〈懸け抜く・懸け入る・吹き懸ける・手縄の勾を切られる・胴を射抜かれる・木の柄をねじ切る〉 ほのぼのと7 〈夜が明く4・並べ居う・顔が見える・灯を見遣る目つき〉 ほれほれとして 〈立つ〉 ほろりと 〈撥を納む〉 むずと14 〈組む6・引つ組む3・攻める・軍勢を二手に押し分く・二手に分かれる・兵が馳せ入る・兵が一手にあはす〉 ゆらと 〈飛び越ゆ〉 ゆらゆらと 〈髪がこぼれ懸かる〉 ゆらりと3 〈下り立つ2・向ひの岸へ超ゆ〉 緩々 〈ゆるゆる〉と 〈手縄を打ち懸く〉 わちわちと 〈振ふ〉 わつと2 〈泣き出だす2〉 わなわなと4 〈出づ・振ふ2・腹に指し当つ〉 をめをめと2／おめおめと 〈降参する・敵軍を通す・都を落ち下る〉

〈漢語系の擬音語・擬態語〉

本文で述べたように、今回の調査では「二字の漢語」で「同じ語根を重ねたもの」「同じ韻を持つ拍を重ねたもの」を対象とした。ただし、平家物語の調査に合わせて、「感々融々」「融々洩々」は二字の「感々」「融々」「洩々」に分けて示した。また、これら以外の形式のものも参考に示した。

殷々 〈梵書〉 陰森2 〈古柳・冬枯れの林〉 洩々 〈繁絃急管の声〉 遙々2 〈山・翠花〉 呦々 〈かなしむ声〉 延々2 〈咏ゆ・日数を送る〉 艶々 〈雲頭〉 峨々2 〈山2〉 赫奕3 〈日輪2・大光明〉 感々 〈律雅の声〉 巍巍2 〈徳・粧〉 急々 〈渡る〉 煌々 〈光〉 睨睨 〈鶯の語らい〉 皓皓 〈灯〉 浩々 〈風〉 袞々 〈血〉 索々 〈絃〉 颯々 〈音〉 粲々 〈南山〉 寂々 〈居る〉 啾々 〈叫喚求食の声〉 重畳 〈煙霞〉 瀼々3 〈露3〉 暈々 〈戸〉 蕭々 〈雨〉 寂寞6 〈空・空山・宮殿・玉顔2・立つ〉 芊々 〈断碑〉 漸々2 〈消え失す・消え去る〉 嬋娟 〈枝〉 湛々 〈水をたたふ〉 澄々 〈粉を粧ふ〉 迢々 〈雲山〉 沈沈2 〈滄海・雲海〉 堂々3 〈事の体・化・礼〉 咄々 〈叱す〉 澆刺 〈魚の鱗〉 續粉3 〈落花・花2〉 平々 〈野原〉 飄々 〈五雲〉 渺々6 〈平沙2・野原・平野・沙頭・海上〉 片々3 〈旗2・幕〉 茫々5 〈草・白波・逆波・天水・烟水〉

満々4〈大洋・海2・海上〉 暝々〈雲〉 綿々〈泪〉 濛々〈兄弟が落居す〉 朦朧
2〈天・金沙〉 幽々〈月影〉 融々2〈律雅の声・繁絃急管の声〉 洋々〈頌する声〉
欄干／蘭干〈涙2〉 離々〈華〉 凜々〈氷を敷く〉 淪々〈池の水〉 累々5〈白骨
2・尸・死骸・五輪塔〉 冷々〈絃〉 玲々2〈鈴の音・光〉 瀝々〈風の音〉 烈々2〈猛
火2〉 漣々〈血〉

参考：漢語系で他形式のもの

安然〈守り居る〉 活如〈心〉 決然2〈勢ひ・ふるまひ〉 駛然〈勢い〉 忽焉〈あり〉
忽然8〈あり・消え失せぬ・出で来・来たり4・出づ〉 粲然3〈日に映ず・日に
輝く・影が移る〉 參然3〈勢い2・敵の勇鋭〉 惘然15〈φ・御座しけり・御座し
あり・失あり・あきれはつ・候ふ・人心地もなし・心地もなし・居る2・守り居
る・人なし・暮らす・心神・気色〉 忙然2〈なる・士卒〉 勃然〈あり〉 默然〈も
くねん〉2〈座す・恥づ〉 油然〈雨を降らす〉 悠然2〈居る2〉 猶然〈悲しむ〉
玲瓏〈音〉 冷然〈慰み〉 歴然〈号〉